

(1)

新・鬼師の世界

—伝統の変容：現代技術と伝統技術のインターフェイス—

高 原 隆

「鬼師の世界」を1998年以来調査研究して来ている。研究成果の発表の場の一つとして、アメリカフォークロア学会がある。いわゆる口頭による発表の場として使っている。American Folklore Society、別名 AFS といい、毎年10月ごろに全米総会が開かれ、毎回アメリカ合衆国各地を移動しながら行われる。そして、ここ10年来、2018年のインド海外研修中以外は毎年参加し、発表を行って来ている。ここでの発表を重視しているのは、AFSは毎回発表の課題テーマを提示してくるので、発表者はその枠組みの中で各々の研究成果を再考することになる。それ故、複眼思考の訓練をする絶好の機会になるのだ。今年(2019)のテーマのキーワードは、「Community Driven」であった。テーマに対する説明がA4で1ページほどにわたる。その意味は、共同体に発する諸問題を共同体の構成員が解決するために行う事業をいう。今回は2019年AFSの発表をもとに、発展させた鬼師の世界の考察について論述する。これまでの「鬼師の世界」における一連の発表とは趣を異にする。

『鬼板師 日本の景観を創る人々』(高原2010)で、三州鬼瓦について次のように説明している。

しかも日本式鬼瓦の技術は日本式棧瓦が登場するおよそ三〇〇年も前の一三六三年

に現れており、三州鬼瓦は記録にこそ残っていないが、現在の記録から推定される起源よりかなり古いと思われる。

一方、鬼瓦産業としての「三州瓦」は享保五年(一七二〇)の徳川吉宗による民家への瓦葺奨励の後、地場産業として本格的に栄え始めたものと思われる。鬼瓦は通常の瓦とセットではじめて屋根の用を足すものであるから、三州瓦の勃興とともに、鬼瓦の世界も活気づいたものであろう。ただ、この享保五年の民家への瓦葺奨励政策は「瓦葺き禁止令」の解禁を意味していた。江戸は火事が多い町であり、明暦三年(一六五七)の明暦の大火の時に、屋根瓦の落下によって多数死傷者が出たために、屋根瓦が禁止され板葺きが義務付けられていたのである。

…また、享保五年以前にあった「瓦葺き禁止令」は六三年の長きにわたって続いている。つまり「瓦葺き禁止令」が発令された明暦三年までは徳川家康が慶長八年(一六〇三)に江戸に武家政権を開いて以来、江戸の町づくりに連動して瓦の需要が盛んであったことを意味している。ただ当時はまだ本瓦葺きの時代であり、一般民家への普及は武家および有力な町人に限られていた。棧瓦が発明されるのは延宝二年(一六七四)のことである。しかし、その本瓦が三州から江戸へ渡ったとすると、三

州における鬼瓦の伝統は一七世紀前半へとさらにさかのぼることになる。江戸での需要に対応するため、鬼瓦の生産は当然のことながら、それ相当の数の鬼板師が活躍していたことを意味する。(高原 2010:21)

また「三州瓦」一般についての現在の状況と重ね合わせると、上記の三州瓦の始まりの意味が時間的な俯瞰を生み出し、立体的な時空間を形成する。

高浜市及びその近郊の町々から製造される瓦は「三州瓦」と呼ばれる。三州とは三河の国の別称であり、現在の愛知県東部を指し、三州瓦とは三河地方とその周辺から産出する粘土で焼いた瓦を一般にいう。特に今日では愛知県の高浜市と碧南市を中心に瓦産業は集中している。地理的には矢作川右岸下流域の衣浦湾一帯で製造されている瓦といってもいい。(高原 2010:8)

この三州瓦を作る鬼瓦職人を鬼師ないしは鬼板師と呼ぶ。特殊な技能を持つ職人集団が過去から現在にわたって三河地方、特に高浜市と碧南市周辺において鬼瓦を製造してきたのである。一般社会にはまだそれほど知られていない人々といってい。一人前の鬼師になるには最低 10 年の歳月を必要とするといわれ、文字通り、手作り職人の世界に生きる人々である。テキスト(教科書)も講習もなく、親方の元で、黙々と働きながら鬼板作りの技術を身体知として修得していくのである。親方から受け継ぐ技術は基本、秘密であり、職場である鬼板屋の中で受け継がれていく。当然のことながら仕事場には他人は入ることはできない。特に他の鬼板屋の職人は仕事場への入室は禁止である。これによって、独特な流派ないしは流儀が生まれる。各鬼板屋の流儀は各鬼板屋内で守られ受け継がれることになる。ただ、製品としての鬼瓦が仕事場から

一般社会へ出ることと、鬼板屋の職人が諸般の事情で他の鬼板屋へ移ることや、独立することが時折あり、これが鬼瓦技術の余所への転移を生み、三州瓦という鬼瓦の地域性を形成することになる。以上のような状況が長年にわたり行われることで、鬼師の世界に独特な風習が生まれることになる。

鬼作二代目杉浦博男が 2005 年にインタビューした際に鬼師の修業の様子を端的に述べている。いかに鬼瓦の技術が伝えられていくのかを垣間見ることができる。

始めにね、「こうやってやるだー、やってやるだ」ってってねえ、一つ、シャーシャーってやってくれるだけの事でね。ほいで、後は見よう見真似でねえ。

ほいで、一緒に働いとる人間がねえ、自分が、とにかく先輩、一人前の人ら等がそういう人らのやるやつを、チラッチラッと横で見ながら、ほいでやってー、ほいで、そうしてもわからんとこは、「おとつあーん、ここがどうしてもできやーへんけど、どうしてやるだい」ってーて言うて来て、「うん、ここかー、ここはなー、こんなことやとつちゃあかんぞー。ここはこうしてやるだあー、ああしてやるだー」ってチョッチョッと直してくれるだけ。昔はくどいこと言わんだったねえ。ほんとにくどいこと言わん。職人でも、ほうだもんねえ。とにかくねえ、「人の技を盗め」だもん。(高原 2017:314-315)

次が鬼板屋から外に出た鬼瓦から技を盗む話である。技術の伝播の形が直に伝わってくる話を博男は披露してくれた。

高浜って所はねえ、「あそこのねえ、あそこのお宮にねえ、ええ鬼が出来たげなあ。あそこの家はものすごい」、学校やなんか

でもねえ、「菊水のものすごいええ物が出来た」ってっていうとねー。夜の夜中にねえ、職人がコソコソッって行ってねえ、肝心なねえ、菊の葉っぱだとかねえ、波なんかをねえ、チョンとこうやってわかんないように削ってもってっちゃう。ほうして、これはどうして作ったかなあ。あの職人はどうやって作りよったかなあ。ほんであんた、あの一、見て。(高原 2017:315)

このように現場で働く鬼瓦職人は自らが仕事をする鬼板屋内で親方や先輩弟子の職人から「技を盗み」ながら技術を身に付けていったのである。また鬼板屋から出れば家の屋根に置かれた鬼瓦に目を光らせて人の技を盗んだのである。三州鬼瓦の生産地、高浜は鬼師たちが集う生産の拠点であり共同体であった。その共同体には三州鬼瓦の伝統の技が町そのものに記憶され、プールされているのである。鬼師の共同体を離れて鬼師になることは事実上不可能に近くなる。

ところが同じ共同体の一員でありながら、実際に鬼板屋の仕事場内には他の鬼板屋で働く鬼師は入れなかった。眼に見えない独自の縛りが共同体の規範として存在していたのである。

服部末男は鬼十という鬼板屋の二代目であるが、2000年に会って話を聞いたときに小さい頃(1940年代)、父親の十太郎がよく付き合っていた鬼板屋を教えてくれた。「天野」、「鬼百」、「鬼八」、「石治」である。これらの鬼師たちとは特に親しくし、行き来していたという。十太郎は時には息子の末男と一緒に連れて、そういった鬼板屋へ何度も行ったことがあるという。それで私が末男に「工場の中に入れてもらったか」とたずねてみた。

工場ん中は入っとらなんだね。やっぱり住まいの方ね。昔は、やっぱり、そうゆうとこに行くのはお互いあれなんじゃないか

なってね。

そうゆうのはあったみたいだね。工場ん中入ったことはないね。

今、割合とオープンだけどね。そうゆう事は。中にはまだ、ちょっと、そうゆう事がない事もないね。たとえ用があって行っても、「事務所の方へ行ってくれ」ってね。それだで、「ああゆうとこは入って来てもらっちゃ困る」って事かな。(高原 2017:318)

鬼瓦の修業の基本は「技術を見て盗む」である。それゆえに各鬼板屋内では、弟子は親方や先輩弟子たちの鬼瓦の製作技術を働きながら見て覚えていったのである。ところがこの「技術を見て盗む」ことを習性として叩き込まれる職人はほかの鬼板屋の職人を警戒することになる。つまり、職人は「技術を見て盗む」だけでなく、逆に「技術を隠す」ことも行うことになる。シノダ鬼瓦の篠田勝久は2000年のインタビューに訪れた際にこの件について言及している。

隠し合いっこするもんだ。

そんだで、あの一、みんな、型でもね、みんな内緒で隠しとくようなもんでね。うん。こういう図面でもねえ。

あの一、昔や何かは隠してね。ほいで、「よく、擦りガラスが…」。今は透明が多いけどね。見られんようにね。隠れてやるんだ。うん。こりゃ、技術の盗み合いっこだもんで。

今は、あの一、すごいオープンになって、みんなして、あの一、若い子だったら、型の貸し借りやらやとるけどね。まあ、お

ら等の頃はそれどころじゃねえんだ。そんなところじゃねえなあ。誰が型を貸してくれる。

何でもほうじゃないかなあ。商売ってのはな。まあ、あの一、マル秘ってやつはな。ラーメン屋でもほうじゃん。なかなか味を、あの一、いい味を教えてやるにゃーなあ。「息子でもなかなか親の味をすぐには教えてもらえん」って。そういう事はあるよ。(高原 2017:558)

このように「技術の盗み合い」と「技術の隠し合い」が鬼師が集う共同体の中に存在し、独特な風習として共同体内に根付いているのである。鬼師が働く鬼板屋の仕事場は一種の技術の集積する聖域となっていた。ところが、鬼師の共同体はそれ自体で成立していない。一般社会の中の存在であり、鬼師そのものが一般社会の中で外見上は普通の人と何ら変わりなく生活している。一般社会の中に埋没し、むしろ隠れたネットワークのように共同体があるのである。それゆえ、一般の人からは見えない共同体となっている。私がこの共同体の存在に気づき、研究調査を始めたのが1998年の6月である。この年には奇しくもWindows98が出た年で、パソコンやインターネットが一気に日本で広がっていった。

何をここで言いたいのかといえば、私自身の「鬼師の世界」の研究が始まった年が1998年でちょうど同じ年に日本でパソコンとインターネットが広がった同時性の不思議についてである。つまり、伝統的な鬼師の共同体が少なくとも17世紀初頭から三州に脈々と続いている事実がある一方で、それを取り巻く生活社会は20世紀末ごろからパソコンを使うネット社会へと急速にデジタル化を始めたのである。また、その当時、映像はフィルムカメラがまだ使用されていた。日本でデジタルカメラが開発されたのは1980年

代であるが、何と2001年にはデジタルカメラがフィルムカメラの生産台数を超えている。私がデジタルカメラに変えたのはそれから7年後の2008年のことであった。さらに社会のデジタル化は進んだ。この1年前の2007年には米国アップル社からI-phoneが発売されている。それを受けて日本では、2008年にソフトバンク、2011年にKDDI (au)、2013年にはNTTドコモが設立され、営業を開始している。片手で持てる携帯電話とパソコン機能が合体したスマートフォンが日本でも爆発的に広がっていったのである。私が研究していた「鬼師の世界」はその20年間の間に、それを取り巻く社会環境が質的にも量的にも大幅に変わったことになる。

伝統的な鬼師の世界はこの急激な社会変化に対応するために、自らの変容を迫られることになる。いつまでもこれまで培ってきた伝統や風習を維持できなくなったのだ。まず動き始めたのは、鬼師の共同体の核に当たる三州鬼瓦製造組合であった。文字通りの「Community Driven」が起こるのだ。平成12年6月に『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』が発行された。この企画を進めたのが、当時、三州鬼瓦製造組合の組合長であった杉浦節夫だった。節夫は「総合カタログ」のアイデアを前々から心に抱いていたという。節夫の構想は実現した『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』よりももっと雄大で、鬼瓦だけでなく、瓦まで全部入れた総合カタログをイメージしていたのであった。これは瓦組合からの賛同を得ることが出来ず、鬼瓦だけのカタログになった次第である。節夫は自分で長年温めてきた考えを1999年4月、三州鬼瓦製造組合組合長就任の挨拶で自らの抱負を組合員の前で語り、具体的な目標を『三州瓦の総合カタログ』の完成としたのである。節夫は次のように語っている。

一万円かかっても良いで、全国の業者がこ

いつを一冊見れば、もう三州の瓦が全部わかるってようなもんをほんとは作りたかった。ほんとはほういう事をしたかったんだけど、ま、取りあえず、鬼瓦だけって事で。(高原 2017:318-319)

三州鬼瓦白地製造組合が黒地組合である三州鬼瓦製造組合から出た節夫の案に同意し、協力体制を採ったことも大きな変化であった。

まあ、言ってみれば敵同士っていう感覚はおかしいけど、あんまり付き合いがないのが、そんな時初めてじゃないのかなあ。二つの組合で。ほやあ、もちろん両組合入っとる人も結構いるけど。うーん、その二つの組合で、揃って一つの事業をやったってことは初めてじゃーないかなあ。(高原 2017:319)

『三州鬼瓦総合カタログ 2000 年度版』とは一体何か。まず、こうした総合カタログ、それも三州鬼瓦の総合カタログは過去無かったことがその意義を知るうえで重要になる。しかも、総合カタログを完成させ、その完成度を上げるために、何と三州にある白地組合と黒地組合が初めて一つの事業として合同、協力して創り上げたものであった。結果、このカタログによって、それまで部外者には見る事の出来なかった三州鬼瓦の全体像が浮かび上がって来たのである。それまでは、三州の各々の鬼板屋が持つかなり限られた品目の中からそれぞれの得意先が鬼瓦を注文し、鬼瓦は日本各地へと運ばれて行っていた。ところが、この 2000 年度版総合カタログの登場によって、顧客は一気に一鬼板屋から三州鬼瓦の宇宙へと投げ込まれることになったのである。三州鬼瓦の世界に「鬼瓦のビッグ・バン」が起きたことになる。別の言葉で表現すれば、ジグソーパズルを引っくり返していた

ようにそれまでバラバラだった鬼板屋の世界が「三州鬼瓦」という明白な輪郭を持つ全体像として立ち上がったのである。当然のことながら、市場の活性化を促すことになり、延いては共同体そのものの活性化を呼び込むことになる。ちょうど、世紀の変わり目に起きた出来事であった。

一方、共同体を取り巻く一般社会は Windows98 以降、急速にインターネット環境が構築整備されていき、人々はデジタル化する社会の中で生活するようになっていくのである。そうした社会変化の中において出て来たのが、次世代を担う 40 代から 50 代の鬼師たちであった。いわゆる社会のデジタル化、インターネット化に順応していった世代である。こうした環境の中から鬼師の共同体は次なる「Community Driven」を始める。

鬼師になるには「見て覚える」が基本である。その「見て覚える」環境は、伝統的には現場である鬼板屋の工場であった。そして社会に存在する現物としての主に屋根に載っている鬼瓦である。それゆえに「見て覚える」環境としての工場の中には他の鬼師は立ち入り禁止が常識であり、マナーであった。ところがメディアの技術が発展していくにつれ、「見て覚える」環境も変わっていった。まず写真の技術の発展、普及によって、現場としての鬼瓦が限りなく質・量ともに身近なものになっている。昔は見る事さえ出来なかったものも、写真として手元に置いて見ることができる。メディアとしての書籍類も同様の効果ないしは影響をもたらしている。現代ではパソコンが一般に普及し、特に若い世代はインターネットを通して鬼瓦の情報への接近ないしは利用も可能になってきている。鬼十こと服部秋彦は鬼十、三代目の鬼師であり、2009 年にインタビューをした時に次のように答えている。

いろんな本とか、インターネットも普及し

ているでしょう。そうゆうんでいろんな情報拾えるんで、そうゆうので、とにかく、そうゆうのはかなり見てますよ。(高原 2017:388)

こうした環境の変化の中で出て来たのが、第二の「Community Driven」すなわち三州鬼瓦製造組合ホームページの立ち上げであった。2007年11月にホームページが始まり、このホームページの製作運営で持って、より一般社会への情報発信が可能になり、鬼瓦や瓦の関係者からだけでなく、広く一般の人々からも「鬼師の世界」への問い合わせが可能になってきている。当時、三州鬼瓦製造組合の組合長をしていた秋彦はホームページ立ち上げに直接関わった人物である。

最初、組合のHP（ホームページ）を作ろうだとか言った時にはね、「そんなもの作って何になるかい」って言われたんだけど。僕もたまたまパソコンとかインターネットを触るのがちょっと早かったんでやってみたら、そうゆうので引き合いもあるし。

全然鬼瓦に興味のない素人さんからそうゆうのが来て。商売でやってると業者間だけじゃないですか。いろいろ問い合わせがやっぱり。直接、設計事務所だとか、そうゆうところからも月に一、二件はね。問い合わせだけだけど。それが実になることは10分の一ぐらいだけど、いろいろ問い合わせが来るから、間口を広げておいて正解だったかなと。(高原 2017:389)

2009年にインタビューした頃のアクセス数は一日に7～80件。多いときは100件を超えるという。少ない日で30件。立ち上げた当初は10～20件だったという。運営していたのは秋彦で、二日に一度の割合で一時間ほどかけては更新していると秋彦は話してい

た。

鬼師の共同体の二つの出来事、『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』と2007年11月の三州鬼瓦製造組合ホームページの立ち上げは、伝統的に内向きで、保守的であった共同体が、共同体を取り囲む一般社会の変化に対応して自ら始めた事業であり、内向きな姿勢を反転させ、社会に向けて自らをアピールするために情報発信をメディアを通して開始したことになる。共同体にとって大きな転機といえよう。

そしてこの事を後押しする出来事が続いた。私自身が行なって来た1998年からの鬼師の研究成果が2010年にまず『鬼板師 日本の景観を創る人々』として出版された。さらに2017年にはこの研究の集大成をなす『鬼師の世界』が完成し、基本データを中心に一つの形にまとめ上げられたのである。この事は事実上の鬼師の共同体の公開といっても言い過ぎではない。しかも、ただの出版だけには終わらなかった。メディアが積極的に取り上げてくれたのである。時系列順にここに記録として残したい。『鬼板師 日本の景観を創る人々』が出たのは2010年3月25日であった。それに対して、2010年7月4日に毎日新聞が全国版で「今週の本棚」のコラムで紹介した。次に2010年7月17日付朝刊で、朝日新聞が名古屋版と三河版に取り上げてくれた。記者は直接私のところに取材に来て、三時間余り語り、充実した記事になっている。2010年12月19日（日）の朝刊には読売新聞が実際の私への取材に基づいた記事をまとめている。2011年1月15日には日本屋根経済新聞社が2010年12月12日に行なった高浜市にある「かわら美術館」での講演『「鬼板師」への道』に参加して、その概要をまとめて記事にしている。さらに2011年5月13日と16日にはケーブルテレビ・キャッチから取材があった。『鬼板師』に基づいた特集の製作をするという。それが『西三河の肖

像 三州瓦いにしえから未来へつなぐ』という映像になりキャッチネットワークを通して2011年6月5日から11日にかけて放送された。それからしばらくは何もなかったが、2016年1月22日には日本経済新聞東京本社から豊橋の旧自宅へ取材に来られ同年2月1日（月）、全国版の36面文化欄が鬼師の記事で埋まった。一方、2017年末に出版された『鬼師の世界』は、まず2018年1月16日に中部経済新聞のオープンカレッジの記事として掲載された。次に取り上げてくれたのが中日新聞であった。本格的な取材の後、丁寧な記事に仕上げてもらい、2018年3月22日（木）に17面カルチャーの欄に掲載された。『鬼師の世界』は680ページB5版の大部な本なので、読み切ること自体が一苦勞である。しかも基本データ中心の内容になっているので、一般の人が目を通すのは大変であろう。第一級の資料といって差し支えない。中日新聞がよく取り上げてくれたものだと、その時も、そして今も思わずにはいられない。同じ月の3月31日にはインド海外研修へと旅立ったのである。2019年3月31日にインドから帰国し、その年に「平成」から「令和」へと元号が代わった。取材はもう無いだろうと思っていた頃、日刊工業新聞社から2019年11月13日（水）に取材があった。それから1ヵ月余りをかけて独自に新聞社は取材を重ねて、『「三州鬼瓦工芸品」後世につなぐ』として2020年1月13日（月）に日刊工業新聞の記事となった。記事として内容のあるものになっている。記事は新聞の紙面3分の二を占める。また記事のことを知ったのは新聞社からの連絡ではなく、経済産業省の今利裕之^{ひろゆき}氏のメールによってであった。

新聞社という伝統的なメディアが私の研究成果『鬼板師』（2010）と『鬼師の世界』（2017）について次々と記事にして取り上げてくれ始めた2010年7月4日から日本社会に「鬼瓦を作る職人が現在も存在する」ことが徐々に

ではあるが広がり始めたことになる。メディアそれ自体の世界においては一般社会の人々以上にその存在についての認知度が上がったであろう事は想像するに難くない。

そういった社会的変化を背景にして、三州鬼瓦製造組合は共同体としての第三の「Community Driven」を実行したのである。平成29年（2017）3月21日に何と三州鬼瓦製造組合組合長、加藤佳敬と高浜市役所の代表計四人が豊橋市曙町にあった私の自宅を直々に訪れ、三州鬼瓦を経済産業省より「伝統的工芸品産業」認定取得のために協力依頼をして来たのだ。この案の発起は平成27年（2015）5月22日に行われた三州鬼瓦製造組合の総会にさかのぼる。そこで、組合長の加藤佳敬が鬼瓦の「伝統的工芸品産業」の認定を得て、鬼瓦製品の付加価値を高めたい旨を述べたのであった。それから私のところへ来るまでに約二年の月日が流れているが、国の出先機関である中部経済産業局および経済産業省との事務レベルでの申請手続きに時間がかかったのである。経済産業省からの申請承認が取れた後、速やかに私への協力依頼へと移り、それからさらに半年をかけて、経済産業省の「伝統的工芸品産業」認定に向けて資料作りに入ったのである。

資料作りは大きく四つにわたり、申出書、概要、資料、プレゼン資料で構成されていた。軽い気持ちで引き受けたものの、実際の実務に入ってみて、その大変さに気づかされることになった。途中で投げ出したくなったことも何度かある。こちらが用意したそれぞれの資料に対して、中部経済産業局より細かい審査ないし検査が入ることになり、それぞれの資料の各項目全てにわたってコメントがついて高浜市役所地域産業グループを通して私の元へ提出した資料が戻って来るのである。これを八月の末ごろまで何回も何回も繰り返すことになった。プレゼンそのものの審査さえも本番の前月にあり、直接経済産業省から高

浜市役所まで担当の伝統的工芸品産業室職員が現場視察もかねて東京から訪れ、高浜市長も列席して小会議室で行われた。その日の夕方に三州鬼瓦製造組合で行われた内輪の会議では伝統的工芸品産業室職員の代表今利氏より厳しいコメントが続き、その対策を求められて協議に入ったのであった。

このような周到な用意のもとで準備が着々と進められ、2017年9月5日の経済産業省別館2階231号室で、伝統的工芸品指定小委員会が開かれたのである。委員会は公開審議と非公開審議とに分けて行われた。非公開審議では傍聴者が外され、私一人になり、私を含めた八人の委員構成となり、やがてすぐに、一人の委員から「伝統産業として見込みがない」という理由でもって反対意見が出され、私の反論に移り、次に委員長（内田篤^{とく}呉）意見が出され、委員長判断の下、各委員の合意を確認し無事合格になった。その結果を受けて会議室を出ると、室外で待っていたその時の組合長、春日英紀と前組合長の加藤佳敬に合格した旨を伝えたのであった。また最後まで世話になった経済産業省の今利裕之氏にその後すぐに会って礼を述べ、互いに喜びを分かち合ったのである。

三州鬼瓦製造組合の事業として行われた組合長二代にわたる Community Driven は地元高浜市当局を巻き込み、国の出先機関である中部経済産業局の熱心な支援を受け、国の代表である経済産業大臣より三州鬼瓦は伝統的工芸品産業として認定されたのである。それまでは私はフィールドワーカーとして基本的立場は三州鬼瓦共同体に対しては、あくまで部外者という認識であった。しかし、伝統的工芸品認定に向けての準備は三州鬼瓦共同体の文字通りの一員になり作業を共にしていたのである。そこまで踏み込まないと出来ない事業であった。

メディアと SNS

1998 年は私の「鬼師の研究」が始まった年であり、同時に日本で Windows98 の発売が開始され、パソコンやインターネットが急速に普及したことは先に述べた通りである。またメディアもデジタル化が進み、さらには I-phone の登場（2007）によって、個人が情報を手軽に発信するネット社会に移行していき、現在（2019）では SNS が普通に行われるようになって来ている。そうした一般社会の変化の中で、伝統的な鬼師の共同体がどのようになっているかをフィールドワークしたのである。結果は予想をはるかに超えていた。「事実は小説よりも奇なり」とはこの事だと思わずにはいられない変化が起きていた。

2019 年 5 月 24 日に同じ目的をもって三人の鬼師に会いに行った。鬼亮こと梶川亮治（81 歳）、鬼十こと服部秋彦（60 歳）、鬼敦こと山下敦（48 歳）がその面々である。まずは鬼師の共同体の中ではすでに頂点を極めている梶川亮治にメディアと技術の関係について尋ねてみた。黄綬褒章（2015）を始めとして数々の賞に輝いている亮治はすでに DVD を通して鬼瓦のつくり方を 2003 年に公開している。何が一体起きているのだろうか。鬼師の共同体の在り方は「技術の盗み合い」と「技術の隠し合い」にあるのではなかったのか。一般から隠れた共同体で何が進行しているのかが、三人の鬼師たちのインタビューを通して見えて来たのである。鬼師たちの中の第一人者である亮治は次のように話してくれた。

やっぱり、同業者というのは、あの一、お互いに商売敵なんですよ。だからできるだけ、そういうものを見せなくて、何ちゅうのかなあ、自分だけでという考えに陥りやすい。

ほだけど、ここまで人が減ってくるとね、そういう事、言っとれんのね。で、これは、産地だけではなくて、よその地方の方にも分かってほしいちゅう事もあるんですよ。

そのためには料理番組と同じようにですねえ、あの、段取りをもってですねえ、このような形の中で、えー、でかすと一番最短距離で、鬼瓦を作ることができますよ。また、創作意欲も湧きますよ。

ただ石膏型で作るとか、この型押しの中では、それは、何ていうのかなあ、あのー、ただの物真似の繰り返しになってねえ、伝統産業としては残り切れないと思う。で、

これから残ってこうと思うと、やはり、そういうメディアを使ってですねえ、あのー、全国どこでも、あの、そういう手作りの面白さ、そういうものを、自分の考え方を、その、鬼瓦を通して表現してほしい。

大きな産地でないと受けれない仕事もあるんです。という意味でね、みんなの技術を高めて共存共栄を図らないと、この業界やってくれないんじゃないかと思いますけど。はい。今までだと、一軒でも、それはね、職人抱えててね、やって行けたんだと思う。ほだけど、今は、そういう時代じゃない。(図1)



図1 DVD『鬼瓦をつくる』を持つ梶川亮治(鬼亮)

亮治は一般社会が抱えている深刻な問題、「人口減少」と同じ問題が、鬼師の共同体に実際に起きていることを指摘し、共同体そのものの存続にかかわる問題として捉え、そのためには旧来のものの考え方、つまり、保守的な技術の伝承の仕方を改める必要があると主張するのであった。そして実際に、亮治自ら、自分の持つ技術の公開をメディアを通して実行しているのであった。

(メディアは)役に立っている。役に立ちます。あの一、視覚にうったえるという事ね。口だけじゃダメなんです。言って説明してもね、その時は分かったようだけでも、もう、全然わかってない。視覚にうったえるちゅう事は、残っているから。わからん時はそれを見ればいいわけだからねえ。それはもうとても…。

数々の受賞に輝く亮治は三州だけでなく、日本全国において最もメディアとの接触が多い人物である。この点を亮治本人にズバリ聞いたのである。

かもしれません。

すると、梶川さんはすごい影響力を持った人になると思うんですが、どうでしょうかと投げかけたのである。

(笑い)。そうですね。ほんでも、一年に四回ぐらいは、テレビに出ますね。ずーと毎年。一年に、四季折々にというわけには行かないけども、どっか、かっかの取材があります。

毎年と言われたので、何年ぐらい続いているのか訊いてみた。20年、またはそれ以上

なのか。亮治は現在(2019)81歳であるが、亮治は鬼師の世界へ15歳の時に入ったのである。

そうですね。はじめはそんなに多くはなかったけど…。

あの、キャッチていうのかなあ。地方の小さなテレビがあるじゃんねえ。あの、町を紹介するっていう。そういうのだと、手が空くとね、ウン、あそこへ行きゃ何かあるだろうという、そういう感じでね、取材されることが多いじゃんね。

あの、鬼瓦の、伝統的なものをいかに残すかというのが根本にある取材であれば応じますけど、ほーでない限りは番組みたいのところには出ないようにしてますけどね。ま、誘いはウジャウジャあります。

こないだ鹿児島テレビの時はね、こないだ、延岡へ、私、10日ばか、鬼瓦作るところを…、行ったんですよ、見せに行ったんです。その時の生徒さんだったのか、その時集まってくれた人が、見てたんだね。「テレビで見たよ」って。

日本風土記というのを去年(2018)10月頃かな、何かNHKで取り上げましたよね。全国だからねえ。ほーすると、やっぱり、電話があつてね、「見たよ」って、こう。(笑い)

注文はほとんどない。ただ「元気でやって見えるの拝見させてもらいました」ぐらいのことはある。嬉しいですよ。それはとてもうれしいです。「ああ、あんたも元気」って言うて、こないだも話しとっただけども。うーん、そういうのはね、あの一、メディアの力。メディアの力っていうのは凄いいね

え。

この様に亮治はメディアを通して、精力的に自らの鬼師としての技を、伝統を、後世に、次世代に、そして三州に残すという願いを込めて披露しているのがあった。その姿勢は「技術の盗み合い」や「技術の隠し合い」とは全く逆の行為であり、発想である。しかも鬼師の技を極めた最高峰の位置にある人物が、三州鬼瓦の技術の伝承と発展を祈願して行っているのである。伝統技術の公開に亮治は踏み切ったのである。亮治の年齢、自ら到達した技の継承、鬼師の共同体人口の減少という現実、そしてメディア技術の発展、さらにメディア界での「鬼師の世界」の認知の広がりなどがタイミングよく重なったものと考えられる。

次に会った人物が鬼十こと服部秋彦である。秋彦は2007年11月に三州鬼瓦製造組合のホームページを立ち上げた人物である。その秋彦にその後のホームページの様子を尋ねたのだ。

今、当時のホームページというのはちょっと今、更新されていなくて、あんまり、こう、機能していないというか、そろそろリニューアルして新しいホームページを立ち上げる時期に来てるなどという話が組合の方でも話が出ているところです。

何で、あまりホームページが機能しなくなって来たかということ、昨今のSNS、フェイスブックだ、インスタグラムだってあるでしょう。その当時はどちらかという情報発信は個人のブログだとか、ウン。そういうものからやっていたと思うんだけど。

今は気軽にスマートフォンが普及して来て、フェイスブックだとか、インスタグラ

ムだとか、そういうものの。まあ、僕もやってるんですけど、そういうものが気軽にやれるようになって来て。手軽に。うん、で、皆さん、どんどん、どんどん、そういう情報を発信されているので、まあ、今、現状を、自分で思うのは、まあ、ちょっと、情報が氾濫しすぎちゃって。

個人的に、自助努力で、自分のところの、自社の努力だとか、個人の努力で、SNSとかそういうので、どんどん上げている人は、まあ、今でいう、その、フォロワーズ、そのフェイスブックなり、インスタグラムなり、その、見に来てくれている人の数を稼いで、で、その中で、「いいね」というのを沢山もらって、色んなところから、全然見ず知らずの人から、もう本当に、業者とか、もう普通のあれ、関係なし。

もっと極端なこと言えば、日本も海外も関係なし。ワールドワイドにいろんなコメントが入って来たりだとか…。それを商売に繋げようと思うとね、なかなか難しい。

秋彦が立ち上げたホームページは2019年の現在、あまり機能しなくなって来ており、逆にスマートフォンの普及に押されて、フェイスブックやインスタグラムによる個人による情報発信へと大きく移行して来ていることが見えて来たのである。情報発信の技術と普及が大きく鬼師の共同体に影響を及ぼしているのだ。しかも、三州鬼瓦製造組合のホームページを始めた秋彦は当時(2007)48歳であり、鬼師の共同体そのものがこの10年余りの間に世代交代をしていたのだ。パソコンやスマートフォンを日常的に一般社会で使用している世代が、鬼師の共同体の中核を担い始めたのである。鬼師の世界にインターネットが浸透し、デジタル化が進行していったのだ。(図2)



図2 パソコンで鬼瓦を見る服部秋彦（鬼十）

秋彦にメディアの影響の変化について尋ねてみた。2009年に秋彦にメディアによる「見て覚える」環境の変化があることを教えてもらった。梶川亮治へのインタビューのちょうど後だったこともあり、「見て覚える」つまり「技を盗む」鬼師独特な習性における何か質的な変化がこの10年間、2019年までにあったのか否かを聞いたのである。亮治が語ったことは何も秋彦には話していない。全く白紙の状態での質問である。

テレビだとか、メディアは…、メディアに関係することは、その、ホームページを作った頃とは、取材とか、たまにあったけど、そんなに無かった。で、「鬼瓦を作る職人っていうのが、世の中に居るよ」っていうのが、こっちから情報発信することで多少は、ちょっとずつ知られて来たのはあるかも知れないけど…。

そういうマスコミ、テレビだとか、新聞だとか、そういうものの取材はメチャメチャ

増えました。だから、つい昨日、春日さんところは（鬼英：春日英紀）、和風総本家っていうテレビ出た。テレビ東京系の番組やってるところで、その取材がなんやかんやで、四、五回来てたのかなあ。

それが終わったとこだし、で、もう一個、昨日も上鬼栄さんから話があって、鬼十さん、何だったかなあ、まあ、「短い番組だけど、伝産品（伝統的工芸品）の関係で取材が来てるんだけど、ちょっと、どう」なんて話があったし…。

で、あと、僕らが（鬼十：服部秋彦、鬼英：春日英紀、鬼敦：山下敦）すごく露出したのは、知恩院の復元やってる時（2016-2017）は、新聞社各社、ケーブルテレビ、NHKは一か月以上、貼り付けで撮影してたし…。

昔は、鬼瓦作る職人さんなんて、全然…。「そんな職業あるの」っていう風で、あれだったけど、この鬼師という職業はかなり社会

的に、まあ、ごく一部かも知れないけど、知られては来てるよね。

この十年間の大きな変化は、「鬼師の世界がある」ことの社会的な認知の高まりであった。マスメディアによる取材並びにその報道の急増が現場で起きていることが明白であった。さらに「技を盗む」ないしは「技を隠す」風習に何かあったのであろうか。秋彦は次のように言っている。

鬼亮さん、話聞かれた？あのへんはどう思っ見えるか分かんないけど、でも、鬼亮さんも、たぶん、何年も前にDVD、『鬼瓦をつくる』というDVDを作った段階で、自分の鬼面の作り方なんか全部オープンにしちゃってるんで、そうゆうのひたすら隠すとか、そういうのはもう無いと思います。

それよりも、ただ、何ていうのかな、今、自分がどこの物件を、どういう仕事を取って、どういう動きをしとるかっていうのは、同業者にはひたすら隠すのは見えるけどね。うん。今は、こんないい物件を、実は、自分のとこだけやとるんだよねという。そういうのはあるけど、作る部分では、全然。オープン。オープン。

だって、それ、マネしてさあ、「私も作しましょう」ねって、一朝一夕で出来るもんじゃない。

「作る部分では、全然、オープン」と秋彦は自らの考えとして述べている。しかもその前提が、鬼亮こと梶川亮治のDVD『鬼瓦をつくる』であった。亮治の影響力が鬼師の共同体に直に及んでいるのだった。

最後に訪れたのが山下敦の仕事場である。敦にメディアからの取材の変化について尋ね

てみた。

20代後半(1999)、先生(高原)に会って、ちょっとぐらいの頃からですか。だけど、自分が知っとるのはそこしか知らんすけど。もしかしたら、もっと前からあったかも知れませんか。ただね、最近、特に、(取材が)多いっすよ。去年(2018)ぐらいから。

敦は「メディアの取材が特に去年あたりから急に増えて来ている」と言うのであった。メディアによる技術の公開については敦は次のように語ってくれた。

メディアで、技術を外に出して…。出しても…、逆に、自分が見た立場でも、もう「すげえな」と思うんですけど、別に身になることは今となっては無いっすよ。昔はあったかも知れない。「すげえなあ。ああやってやるんだ!」。今は無いっす。「へえ、こうやってやるんだ」みたいな。古臭いもんだから、こう、見とつても、「基本が出来てねえなあ。ニセもんだ」。(笑い)

一般の人にはわからんすよ。はい。だから、テレビに出たところで、わからんす。

また敦は服部秋彦が言っていたSNSの常習犯であった。普通ではないのめり込めりで、しかも深い意図をもって行なっているのであった。(図3、4)

自分の場合だと、フェイスブックでまめに作って、ポンボコ、ポンボコ載しとるんですよ。これ、SNSっすよ。ほうすると、みんな見取ってくれて、割と見取ってくれて、どういう感想するかわからんすけど…。屋根工事屋さんとかが「超いいね」来たところで、奴ら(鬼瓦を)使う人なもんすから、技術なんてわからへんじゃ無いっすか。



図3 SNSをする山下敦（鬼敦）

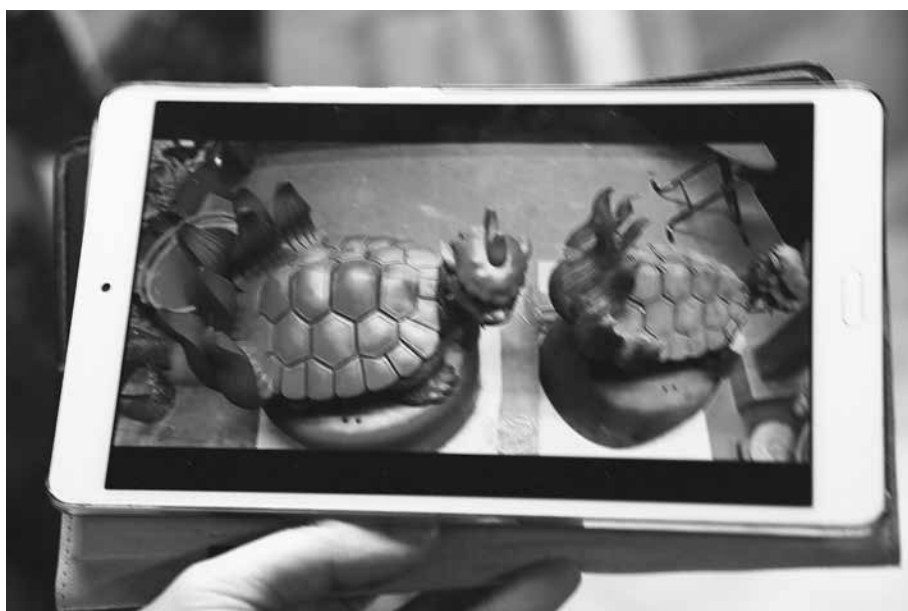


図4 SNSにUpした復元中の玄武

たまに島根かなんかの（石州瓦の産地）、明らかに自分より先輩のおじさんが、今日はこういう土で、どうのこうので…、ちょっとマニヤックなこと書くと、裏のフェイスブックのメッセージみたいなのやつで、裏の方で、「いや、あれ、どうやって、どういうあれなんすか」とか、そういうの、たまに来るっすよ。

僕の場合はもう、フェイスブックで、一応世界マークで配信というか。誰かがポチッと押したら、そこから「いいね」もらってるんですけど。自分の場合はどっちかというと、マニヤック過ぎちゃうもんですから。同業の若い子だとか、リーダー（秋彦）とか、あっくらへんが見て、「今、これやっとな」とか…。びゅーッと大きくして見ると、「たいたことねーな」とか、言われとるかも知れん。

ほいけど、ワー、すげえ、こーやってやるんだとかじゃなくって、何気なく見て、「今、これやっとなんだ」。それで、ちょっと興味ある若い職人とかは、ピョーンと大きくして、「さっすがー、鬼敦さん、やるねー」。ほんなもんじゃ無いっすか。

ここあたりで見えて来るのが、敦のフェイスブックはプロ仕様になっていることである。素人が見ても、本当の良さがわからない世界。つまり、「猫に小判」の世界。見る人を選ぶフェイスブックなのだ。それは同業者向けと言っていい。

自分の場合だと、ケイタイ依存症だけど、作っちゃあ、パシャ。棚にボンと置いて、作ってるとこ、何とかこっちから写して、俺かっこいいなとか。（笑い）そして、載せる。その感覚は何なんすかね。別に見てくれよじゃなくて…。本物を残したいんで

すよ。本物と言いますかねえ。自分が先輩たちから学んで来たことは残しとかにやいかんと。やっぱり、難しいんすよ。

僕はフェイスブックとかに、こう、毎日アップしとるんですよ。作っとなものを。その技術を隠さんちゅうわけですね。たまに、この木型、これは瓦。ペンペンペンペン。鎌、シュツ、シュツ、シュツ、シュツ。あれは本当に習っというよかったですね。もう、やれる人が、多分、三人おるか、おらんかすねー、自分を入れて。そういうの、動画で撮って、アップすると、参考にしとる人いますよ。確かに。あと、何か、ここに雲があって、音楽をルンルンにかけて、この辺にスマホ置いて、彫るじゃないですか。昔の流儀っすよ。

ほすると、それを見て、「参考になります」っという人がおったす。だから技術の伝承っすよ。今どきは。

真似してくれるっていうか、「これが俺の学んで来たことよ」で出しとるわけですよ。

敦がフェイスブックを始めて、2、3年になるという。一日に三回フェイスブックに上げているという。敦は次世代を担う中堅の鬼師のボーズである。（高原 2017:429-459）現在 48 歳の気鋭の鬼師が全く新しい技術の伝承を開始しているのだった。特定の弟子を持たない、文字通り、公開を基本にした技術の伝承である。さらに敦の伝承の仕方は、長い間、鬼師の共同体で行なわれて来た不文律、「他の鬼板屋の職人は仕事場へは入れない」を不問に付しているのだ。つまり、フェイスブックに載せる敦の映像写真は鬼敦の仕事場そのもので撮られたものであり、技術の公開のみならず、仕事場そのものの公開になっており、フェイスブックそのものが同業者の仕

現場を見る目になっているのだ。

もう、今だと、こうやってずーっと動画で撮って、「俺の仕事場」とか言って…。

全部丸見えっすよね。オープン、オープン。

まとめ

『鬼板師』(2010)でも『鬼師の世界』(2017)でも気づかなかった視点について今回考察してきた。切っ掛けはAFS2019の課題テーマ「Community Driven」である。鬼師のフィールドワークを始めた1998年から振り返って見て、一つの景色が浮き上がって来たのである。それはWindows98が名前の通り1998年に発売され、日本でパソコン及びインターネットが急速に広がり始めた年でもあったのである。それからほぼ20年経った今、インターネット環境は整備が進み、2007年のI-phoneの発売とともに、現在では個人が携帯コンピューターを持ち歩き、ほぼどこからでもネットも電話も出来るスマートフォンの時代に突入し、一人に一台が当たり前で、逆に私のように持っていない人の方が特殊と見られる世の中になっている。人はいつでも、どこでも(通勤中、歩行中、運転中、授業中など)、前に顔を向けずに、下に向け、スマートフォンと睨めっこ状態を取る時代になった。

こうした社会変化の中に生きる鬼師たちの間で、フィールドワークを始めて20年間の月日の中で、世代交代が現実のものとして私の目の前で進行していった。この世代交代を経て、今、次世代を担う40代から60代の鬼師が現場を運営する中心になっている。この世代がまさしくWindows98世代であり、スマートフォン世代なのである。

「技術の盗み合い」、「技術の隠し合い」、「他の職人は仕事場へ入れない」的な縦割り社会

を伝統とする鬼師の共同体は長年の暗黙の風習の変容をここ十年ほどの間に徐々に、かつ加速度的に、さらには革命的に進行させて来ている。内向きで、保守的であった共同体は三回にわたる「Community Driven」を経て、外向きで、革新的な共同体になって来ている。長年、代々にわたって培って来た鬼瓦作りの技術を各鬼板屋ごとに受け継ぎ、他の鬼板屋への流出は出来る限り防ぐやり方を捨て、共同体内で技術をプールし、メディア上で、ネット上で、公開すると為始めたのである。

この変容の主因の一つが、私自身が研究調査した鬼師の共同体を『鬼板師』、『鬼師の世界』として2010年と2017年に出版したことが大きい。これで共同体そのものが公開となった。それまでは一般社会は「そんな職業あるの?」と言うほど鬼瓦を作る職人すなわち鬼師については一般認識の外だった。そうしたところへ、偶然にも多くのマスメディアが何度もこの二冊の本を記事として取り上げてくれたのである。このようにして一般社会にマスメディアを通して鬼師の存在が知られるようになったのだ。

取り分け、メディアはこの事に特に敏感で、以後、直接、各鬼板屋を取材し、映像化し、テレビを通して一般に放映し始めたのである。鬼師の共同体にかつて無かったメディア革命が起きている。陽の目を見る事のなかった鬼師が、そして人の目に映らなかった鬼瓦が、今、一般社会に浸透しつつある。メディアを通して、お茶の間から。

このメディア革命とほぼ並行するように、フェイスブックによる技術の伝承革命が鬼師の共同体内で同時進行している。鬼師自らが自らの技術を自ら公開し始めている。鬼師の共同体は今、大変革の時代へと突入していると言えよう。新しい鬼瓦手作り職人時代の幕開けなのかもしれない。

参考文献

三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合

2000 年『三州鬼瓦総合カタログ二〇〇〇
年度版』 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白
地製造組合

高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会・高
浜市やきものの里かわら美術館

2003 年『鬼瓦をつくる—愛知県高浜市の
三州瓦—』DVD 高浜市伝統文化伝承推
進事業実行委員会・高浜市やきものの里か
わら美術館

高原 隆 2017 年『鬼師の世界』 あるむ

高原 隆 2010 年『鬼板師 日本の景観を
創る人々』 あるむ

